

小学校

平成 6 年 度

教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

教 育 研 究 員 名 簿

	地区名	小学校名	氏 名
学級活動・低・中学年	品川	第三日野	武田朋子
	足立	栗原	高橋美喜
	江戸川	西小松川	鎌田伸子
	八王子	陶鎔	嶋田雅代
	三鷹	第六	坂口秀一
	府中	住吉	建信子
	調布	布田	○井口進
	東大和	第五	清水せつ子

	地区名	小学校名	氏 名
学級活動・高学年	江東	第三大島	島埜秀男
	目黒	碑	丸節子
	大田	多摩川	青鹿和裕
	世田谷	中里	中野浩一
	世田谷	東深沢	坂幸子
	渋谷	猿楽	○大倉喜代美
	足立	北鹿浜	梅北恵美子
	葛飾	花の木	太田則子
	町田	三輪	松井真澄
	福生	福生第一	岡部操
	清瀬	清瀬第九	谷口雄麿

	地区名	小学校名	氏 名
児童会活動	中央	月島第三	茂野明敬
	杉並	杉並第四	山村あずさ
	豊島	椎名町	大和秀一
	江戸川	下鎌田東	金子健也
	八王子	小宮	野口直也
	昭島	つが丘北	網中弘子
	町田	町田第五	○古門雅司
国立	国立第三	板橋佳子	

	地区名	小学校名	氏 名
学校行事	大田	大森第三	深山澄夫
	中野	鷺宮	福田豊
	板橋	弥生	○坂本正
	練馬	豊溪	◎若林正人
	練馬	光和	世古徳浩
	青梅	第 4	野田代理恵

(◎：全体世話人 ○：分科会世話人)

担 当

教育庁指導部主任指導主事 寺崎千秋
 多摩教育事務所指導主事 佐藤正吉

目 次

I	研究の概要	2
II	共に活動する意欲や態度を育てる支援のあり方 (学級活動低・中学年分科会)	3
1	主題設定の理由	3
2	研究仮説と仮説検証の視点	3
3	研究仮説の視点	4
4	研究内容	5
5	まとめと今後の課題	7
III	一人一人が主体的に取り組み、次の活動への意欲を生む学級活動の指導の工夫 (学級活動高学年分科会)	8
1	主題設定の理由	8
2	研究仮説と仮説検証の視点	9
3	研究内容・(1)視点1「見通しをもつ場の工夫」の実践事例	10
	(2)視点2「ふりかえる場の工夫」の実践事例	11
4	まとめと今後の課題	13
IV	互いに支え合い、学び合いながら、意欲的に活動する代表委員会の指導の工夫 (児童会活動分科会)	14
1	主題設定の理由	14
2	研究仮説について	14
3	仮説検証の具体的な手だて	15
4	研究内容・実践事例1, 2, 3	16
5	まとめと今後の課題	18
V	児童一人一人が、積極的に参加できる学校行事の指導の工夫 (学校行事分科会)	19
1	主題設定の理由	19
2	研究仮説	19
3	研究内容	19
4	各行事における具体的支援の仕方(一例)	20
5	実践事例(学芸的行事)	22
6	まとめと今後の課題	24

I 研究の概要

共通研究主題

互いのよさを生かし、認め合い、高め合う集団活動を通して

児童の自主的・実践的態度を育てる指導

児童一人一人が、心豊かに、主体的・創造的に生きていくためには、児童のよさや可能性が生かされなければならない。そして、その児童のよさや可能性は、望ましい集団活動を経験することや様々な役割活動を通して、高められ、豊かになる。児童がその集団活動の中で、自分の役割を自覚し、仕事の責任を果たすためには、他の児童の協力が必要であり、また、集団活動を行うには、そのために必要な知識や態度を学びとることが必要になる。

そのような集団活動を通して、主体的に生きようとする姿勢や態度の基盤を培い、集団の中で自己を生かし、日常生活や学習への適応を図り、学校・学級生活を向上させることが、特別活動の基本的な特質である。

一般に人間関係が希薄だといわれている現在、他人を思いやる心を持ち、友達と協力してたくましく生きる力をもつ児童の育成を図るためには、一人一人の児童に学校・学級集団の一員としての自覚を養うとともに、望ましい集団生活や人間関係を築くための児童による自主的な活動を、いっそう充実させる必要がある。

また、なすことによって学ぶ教育活動としての特質を持ち、望ましい集団活動を通して、個性の伸長と社会性を育むことを目指す特別活動においては、学校や学級集団の中で、児童が様々な課題を解決するために必要な力を、総合的・発展的に育てることが大切である。

以上のことから、本年度は、

- ・ 児童が課題意識をもって取り組み、互いの活動や役割を認め合い、励まし合える人間関係を育成すること。
- ・ 活動を通して、自分のよさを自覚するとともに、そのよさを学校・学級集団の中で認め合い伸ばしていくことができるような場の設定と支援の在り方を工夫すること。
- ・ 児童の主体的な学習活動の場と機会を多く設定することによって、児童が成就感・達成感満足感等を味わったり、所属感・連帯感を深めたりして、新たな意欲の向上を図ること。

等が大切であると考え、本研究主題を設定した。

なお、研究を進めるに当たっては、各分科会で、次のように研究主題を設定して、共通研究主題にせまることにした。

- ・ 学級活動低・中学年分科会 「共に活動する意欲や態度を育てる支援の在り方」
- ・ 学級活動高学年分科会 「一人一人が主体的に取り組み、次の活動への意欲を生む学級活動の指導の工夫」
- ・ 児童会活動分科会 「互いに支え合い、学び合いながら、意欲的に活動する代表委員会の指導の工夫」
- ・ 学校行事分科会 「児童一人一人が、積極的に参加できる学校行事の指導の工夫」

Ⅱ 「共に活動する意欲や態度を育てる 支援のあり方」

(学級活動低・中学年分科会)

1 主題設定の理由

学級活動における低学年児童の実態を振り返ると、いろいろなことに興味をもち、自分のやりたいことをすぐ言葉や行動で表すことで喜びを感じていることがある。しかし、場合によっては、自分の思いが素直に出せないで戸惑っていることもある。また、教師に認められ、励まされることが、どの児童にとっても「認められた・分かってくれた」と満足感を味わう経験となっている。友達同士の集団活動においては一緒に活動してはいるものの、ささいなことでもめたり、自分中心に行動したりすることがたびたびある。そのため、話し合いそのものがその場その場の考えに左右されたり、自分の考えに固執したりすることが多く見られる。

中学年の児童の学級活動では、次に話し合われる議題が十分理解されていなかったり、議題について自分なりの思いや考えがもてていなかったりすることがある。また、話し合いの場で意見を積極的に発言する児童が限られてくることや活発に意見を出す児童だけで話し合いが進行していくことがある。

これらは、みんなでよりよいものをつくり出そうとしたり、児童の自主的・自治的態度を育てる上で大きな課題となる。低学年も中学年も話し合い活動において、児童一人一人が継続的な議題への関心や共に解決しようとする課題意識が十分にもてていないこと、話し合い活動の場で自分らしさを発揮し、友達と協力して課題を解決した経験が少ないことなどが上げられる。このことを解決するため、話し合い活動において、児童一人一人が議題に関心をもって話し合いに臨めるように事前の指導を工夫する。その中で、互いに認め合える場や機会を多くもてるように支援することができれば、一人一人の児童が満足感や成就感を味わい、協力して活動するよさや楽しさを実感し、共に活動する意欲や態度が育つと考え、研究主題を決定した。

2 研究仮説と仮説検証の視点

児童一人一人が自分の願いや学級の諸問題に気づき、それを話し合い活動を通して共に解決しようとする意欲をもつためには、共通の課題意識をもつことが必要である。その中で、多様な考えのあることや同じ考えをもっている友達がいることに気づき、互いに認め合うことができるようにすることが大切であると考えた。そして「こんなことができるようになった。」「友達や先生に認められた。」「仲間と共に活動することが楽しい」という実感を繰り返しもつことができれば、共に活動する意欲や態度が育つであろうと考え下記の研究仮説を設定した。

研究仮説

児童が共通の問題意識をもち、それを解決しようとする過程の中で、互いに認め合えるような支援を工夫すれば、共に活動しようとする意欲や態度が育つであろう。

3 研究仮説の視点

視点1 議題の意識化・共有化の工夫

意識化を図るために	共有化を図るために
<ul style="list-style-type: none"> ○一人一人が思ったこと、考えたことを帰りの会などに、全員で議題カードを書く。 ○学級会カードに、事前に議題についての心情や考えを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○次に話合う議題を掲示する。 ○学級全体で議題決めの話し合いをもつ。

視点2 認め合う場の工夫

自己評価・相互評価	教師の働きかけ
<ul style="list-style-type: none"> ○学級会カードにどんなことをがんばりたいのか。また、どんなことをがんばったのかを書く。 ○友達のがんばったこと、がんばってほしいことを発表したり、カードに書いたりする。 ○話し合いの場で、どんなことをめあてにするかを決め、それをみんなで振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教師が認め合いの観点を明確にし、具体的な活動をほめる。

視点3 実践への意欲づけの工夫

<ul style="list-style-type: none"> ○係の活動計画を作成する。 ○話し合いで決まったことや取り組みの様子を掲示する。 ○実践にあたって一人一人の役割やがんばりたいことを書く
--

※事前・話し合い・事後の一連の流れの中で自分を振り返り、次への意欲や期待感をもち、意欲的に活動する手立てとして、学級会カードを工夫した。

学級会カード 名前()

議題の意識化・共有化	話し合い活動	実践への意欲づけ
議題	期日 月 日() 曜日	月 日() 曜日
出したわけ	司会 [] 副会 記録 [] [] [] [] ノート記 []	所帯(やること)
心情を書く	話し合いの柱	しごとは がんばりたいことは
考え	意見がはいりましたか? [] 意見が聞けましたか? [] 心に響いた発言は()さん・君の	みんなに喜んでもらえることは
意見をおおろと思いませんか 意見をおこら思いませんか	わけ	
☆()から()まで()へ月日	☆()から()まで()へ月日	☆()から()まで()へ月日
()より	()より	()より

4 研究内容

(1) 実践事例 2年 議題「こんど話し合うことを決めよう」

視点1 議題の意識化と共有化の工夫

手だて 『意識化』 ①何でもカード（議題カード） ②学級会カード

①では、「クラスで困っていること」「みんなでやってみたいこと」「先生やみんなへのお願い」など、一人一人の児童に思っていること、考えたことを自由に書くように助言した。そして、そのすべてのカードを分類して掲示することにより、自分の考えが認められていることに気付くと共に、友達の実考えにも気付くようにした。

②では、「みんなでこんなことをやってみたい」という意欲をもって、話し合いに参加できるよう、事前に自分の考えを書いておくことを助言した。そして、自分の考えに自信をもち発言しようとする意欲をもつようにするために、教師が一言支援となる言葉を記入した。

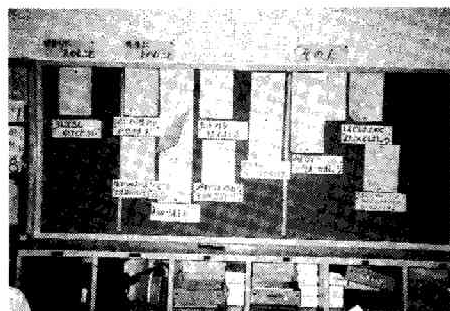
『共有化』 ①何でもカード（議題カード）の掲示 ②議題決めの話し合い

カードの掲示により、いろいろな理由があることに気付くようにした。そして、たくさん出た「みんなでやってみたいこと」の中から、次回は何を議題にするかを、話し合いで決められることに気付いて、議題に関心をもつようにした。

活動の概要

本時は、『議題決めの話し合い』で、次回の学級会は、①「何について話し合うのか」②「どのように決めるか」を話し合いの柱とした。

①では、児童一人一人が、事前に考えてきたことを訳をつけて発言することができた。発言できなかった児童は、拍手をして発言を称賛した。前もって「みんなでやってみたいこと」を、カードにして黒板に掲示しておくことにより、黒板記録が楽になり、発言とほぼ同時に書いていくことができた。



②では、たくさんある「やりたいこと」に順番をつけていくのではないかと、教師は考えていたが、①の話し合いのときに、「合体して一緒にやりたい」という意見が出て、自動的に②の話し合いに入ってしまった。「多数決」「合体」「話し合いを続けて意見を一つにまとめていく」という方法のうちのどれにするか、という話し合いになってしまった。合体は一度にいろいろなことができる。話し合いは時間がかかる。などの意見により合体するということに決まった。

終末の「よかったことの発表」では、初めてだったために、友達のことを認めることができず、「自分がたくさん言えてよかった」という意見がほとんどだった。

考察

自分たちが書いた議題カードをもとにして話し合いが行われたことにより、クラスにいろいろな問題があることに気付くことができた。そして、今まで教師が決めていた議題を、自分たちで出して、自分たちで決めていくことができるということが少しわかったようである。その後の話し合いにおいて、自分たちが決めたものだという気持ちからか、学級会カードに全員が事前に意見を考えるようになったり、全員が発表するようになったりした。これらのことから、『カード』『議題決めの話し合い』は議題を意識させ共有させるために有効であったと考える。

(2) 実践事例 4年 議題「昔のおもしろ遊び大会をしよう」

視点1及び2 議題の意識化と共有化の工夫・認め合う場の工夫

手だて 議題の意識化と共有化では、・学級の全員で議題を決める、・どんな大会にしているかのアンケートをとる、・学級会カードの『お楽しみは?』の欄に、自由に議題に対する思いを書き込む、・議題を掲示する、・カードに話合いの柱に対する意見を書き、担任からのコメントを書く、などを行った。また、認め合う場としては、・学級全体で話合いのめあてを決め、終末に振り返る、・自分の頑張りたいこと、頑張ったことを書き、自分を認められるようにする、・心に残った友達の発言を書き、認め合いを意識する、・メッセージカードを事前・本時・事後に書き、どの場面でも友達を意識し、励まし合う、・教師が認め合いの観点をはっきりもち、ほめていく、などを行うようにした。

活動の概要 話合いは、①どの遊びをやるか、②楽しくやるためにはどんな工夫があるか、の二つの柱立てで行った。①については、事前のアンケートの結果を参考に、理由を付けながら、こま・カルタ・竹とんぼ・けん玉・あやとり・百人一首・めんこの7種類の遊びがやりたい遊びとしてあげられた。その中の一つをやるか、3つくらいをやるか、全部やるかが話し合われ、体育館という広い場所であり、また、みんなの、やりたい気持ちを生かすという意見が出て、全部やるということに決まった。②については、・係を作る、・ふれあい給食に来てくれたおじいちゃん、おばあちゃんを招待する、・みんなが文句を言わないで楽しくやる、・自分たちでカルタを作ったりする、・大会みたいにやる、・教えてあげたり、できたら拍手をして盛り上げる、・好きなところについてやる、・みんなでまわっていく、など様々な意見が出された。出された意見を、まわり方について、係について、遊びのやり方についてなどに教師と一緒に整理し、朝の会などで話合いを続け、決めていくこととした。

終末の、心に残った発言を書く時間では、みんなの考えをまとめるような意見や、おじいちゃん・おばあちゃんを招待しようという優しい気持ちがあふれている意見などを認めている姿が見られた。メッセージカードには、ふだんあまり意見を言わない子の発言に対して、「勇気を出して言えてよかったね。」とほめたり、司会の子に、「大きな声で言えたね。しっかりまとめてくれてありがとう。」と気持ちを伝えるなど、よかったことを認め合う場面が見られた。

考察 議題の意識化と共有化という点では、全員による議題決定、議題への楽しみを書く、柱立てについての事前の考えを書くなどの取り組みが、議題を自分のものとしてとらえ、また学級全体のものとしてとらえるということに関して有効であることが分かった、何を話し合うのか、自分の考えはこうだということがはっきりとわかって学級会に臨むと活動の意欲が違ってきた。認め合う場という点では、事前と本時



で、自分のがんばりたいこと、がんばったことをくらべることにより、自分を認めるということ意識することができた。そして、心に残った発言の欄を設けることで、より意識して友達の意見を聞き、そのよさを認めようとする気持ちが育ってきた。また、メッセージカードでは、友達からの励ましや称賛が、直接自分の所に届き、それが活動への意欲となった。

5 まとめと今後の課題

(1) 研究の成果

①視点1 議題の意識化・共有化

議題カードを全員で書いたりそれを掲示したりすることによって、議題への関心が高まり、一人一人が思ったことや考えたことを議題カードや帰りの会で出せるようになった。また学級会カードに事前に議題への思いや考えを書くことにより議題への関心や発言しようとする意欲が見られ発言が増えた。そして、全員で議題決めの話し合いをすることにより、みんなで解決しようとする意欲的に取り組むことができるようになってきた。

②視点2 認め合う場の工夫

学級会カードに自分のがんばりたいことや、がんばったことを記入することにより、自分自身のがんばりに気付くとともに、友達のがんばりにも関心をもてるようになってきた。そして、心に残った発言を発表し合ったり、メッセージカードを紹介したりすることによって、クラス全体で認め合うこともできるようになった。メッセージカードをもらうことにより、次への意欲がもてた。特に教師が「認め合いの観点」を明確にししながら、具体的な行動を取り上げることで、発表やメッセージカードに、称賛だけでなく応援、励まし、期待、誘いなどの言葉もみられるようになり、助け合いたい、教え合いたいという気持ちを行動で表すようになってきた。

現在では、特別活動の時間にとどまらず、学芸会などの行事や、当番活動においても友達のがんばりやよかったことに気づき、メッセージカードに書いたり、帰りの会で発表したりするようになってきた。これらのことから、認め合いの気持ちがより高まってきているのではないかと考える。

③視点3 実践への意欲づけの工夫

学級会カードの工夫により、事前、話し合い、事後というどの場面にも自分がいるか自覚できるようになった。そのため、よりよい実践のための自分の役割、係の活動計画が明確につかめるようになり具体的なイメージをもって共に意欲的に活動するようになった。

(2) 今後の課題

○ 児童一人一人が議題に関心をもち、みんなで解決するための手だてとして、事前に議題を掲示したり、議題についての心情や考えを書いたりして、話し合いに臨むように支援を続けてきた。しかし、議題によっては、関心がうすかったり、自分の心情や考えを書き表すことができなかつたりした児童もいた。こうした児童への細かな支援をさらに工夫する必要がある。

○ 事前、話し合い、事後を通して、認め合いを中心に観点を明確にし支援をしてきた。また、学級会カードやメッセージカードを使って、児童一人一人が互いに認め、励まし合えるように工夫をした。しかし、メッセージカードがもらえなかつた児童もいて、こうした児童への支援の方法を工夫したい。

○ 実際の活動へ向けての役割が果たせるような活動時間を確保することが大切である。以上のことが研究を進める中で、今後の課題として浮かびあがってきた。そして、児童がより共に活動するための支援のあり方を考え、深めていく必要がある。

Ⅲ 一人一人が主体的に取り組み、 次の活動への意欲を生む学級活動の指導の工夫

(学級活動高学年分科会)

1 主題設定の理由

高学年では学級活動を通して、一人一人の児童が学級の一員であることを自覚し、学級生活の充実と向上に関する課題意識を主体的にもつことや、様々な活動に意欲的に取り組んでいく態度や力を育てたいと考えている。

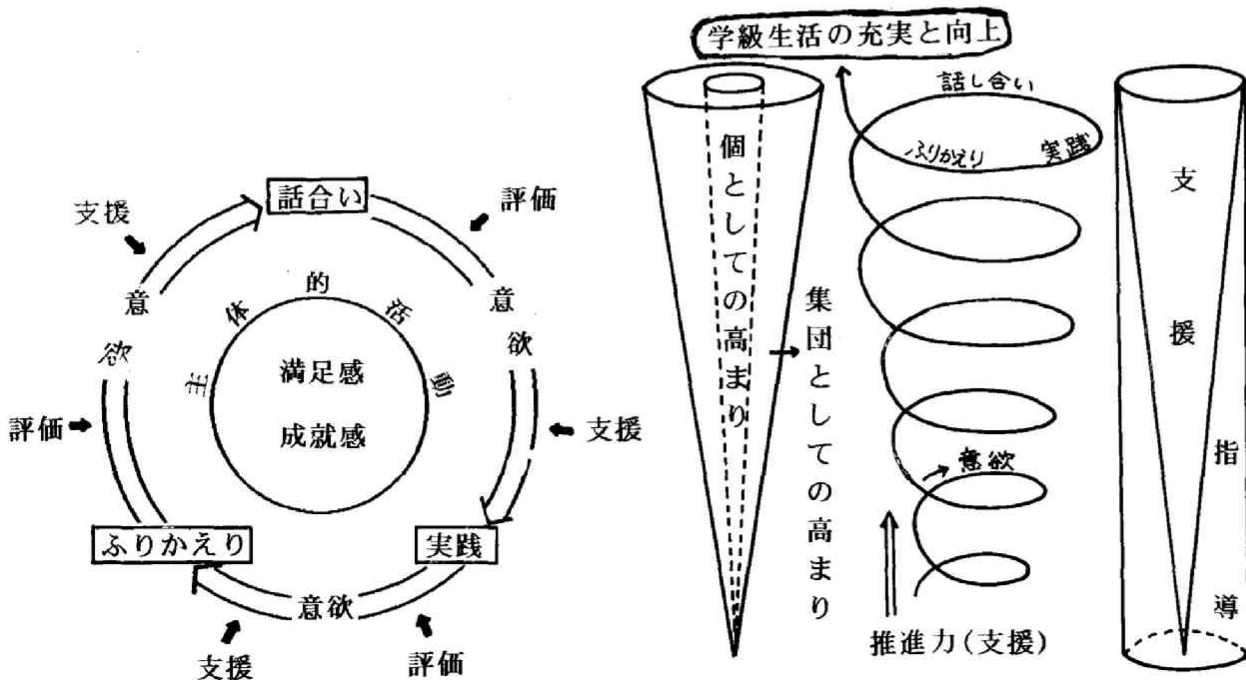
しかし、身の回りの諸問題に対して、自分たちの問題としてとらえ解決していこうとする態度があまり見られなかったり、計画したことがなかなか実践に結び付いていかなかったりするという実態も指摘されており、学級活動のより一層の指導の工夫が必要である。

指導の工夫をする際には、学級活動において、話し合い、実践、ふりかえりという一連の活動がつながっているということを児童が意識することが重要であると考えた。すなわち児童一人一人がこの一連の活動のつながり（連続性）を意識しながら、活動全体の見通しをもち、実践したことがどうであったかをふりかえることで、次のよりよい活動につなげていくことができる（発展性）と考える。

そこで本分科会では、一連の活動が連続的、発展的に展開されることで、一人一人が主体的に取り組み、満足感や成就感を得ることができ、更にこのことが、次の活動への意欲へつなげると考え、本主題を設定した。

なお、本研究を進めるにあたり、本分科会では意欲を「活動を通して得た満足感や成就感が生み出す次の活動への原動力となるもの」ととらえた。

<連続性や発展性のとらえ方>



2 研究仮説

学級活動の一連の活動において、見通しをもつ場やふりかえる場の工夫をすれば、一人一人が主体的に取り組み、満足感や成就感を味わい、次の活動への意欲がうまれるだろう。

<仮説検証の視点>

視点1 見通しをもつ場の工夫	視点2 ふりかえる場の工夫
<p>一人一人が学級活動に主体的に取り組むためには、一連の活動を意識しながら、見通しをもって活動していくことが大切である。話合いの必要性、活動の時間や条件、自分の役割などが分かると、先を見通し自分の活動の方向が見えてきて、自らを活動の中心においた参加態度になっていくと考えた。</p>	<p>活動の終わりにふりかえりの場をもつことで、よかった点や改善点が明らかになり、満足感や成就感を味わい、次のよりよい活動へつなげていくことができると考えた。</p>
<p>① 学級活動計画を立て、掲示する。 <ul style="list-style-type: none"> ・一連の活動の期間や、他との関連がわかるもの ・題材の予定がわかるもの (年間通して、学期ごと、月ごと) <p>② 提案理由を基に話合いのめあてをつくる。 (学級活動ノート)</p> <p>③ 話合いのめあてを基に自分のめあてをもつ。 (学級活動ノート)</p> <p>④ 一連の活動のめあてをつくり、掲示する。 (題材により)</p> <p>⑤ 役割を明確にする。 (ふりかえりカードに記入)</p> </p>	<p>① 学級活動ノートに自己評価・相互評価を記入する。 (項目別、記述式)</p> <p>② ふりかえりカードを書く <ul style="list-style-type: none"> ・話合い、準備等それぞれ終了後を書く。 (題材により実施する) <p>③ 学級全員で一連の活動をふりかえる。 <ul style="list-style-type: none"> ・朝の会や帰りの会を利用して、感想を発表し合う。 ・1単位時間を取って行う。 (題材に応じて) </p></p>
<p>連続性・発展性のある学級活動を意識する。</p>	

3 研究内容

(1) 視点1「見通しをもつ場の工夫」の実践事例

視点1の① 学級活動計画を立て掲示する 6年

教師が学級活動年間指導計画を作成し指導に当たると同時に、児童も学級活動計画を作成し見通しをもって活動することがとても大切だと考えた。そのためには、学年や学期の初めに話合いの時間を確保しみんなで計画を立て、必要に応じて途中で修正しながら活動を進めることにした。また、学級活動コーナーを設け、活動の方法や計画を掲示しておくことが効果的であると考えた。

これらの結果から、学級活動計画をきちんともつことによって先を見通せるため、児童が自分から予定を立て、積極的に取り組む場面が多く見られるようになってきた。児童の感想からも「予定や計画がはっきりと掲示してあるので、次に何をやればよいのか分かりやすい。」と好評であった。

(学級活動カレンダー 2学期の例)

9		10		11		12	
日	行事	日	行事	日	行事	日	行事
木	始業式・大掃除	日	国民の日	火	学芸会	木	個人相談(終)
金	給食(始)	月		水	学芸会	金	②
土		火		木		土	
日		水		金		日	
月	④	木	⑤	月		月	⑥
火	社会科見学(4)	火	⑦	火		火	
水		水	②	水	移動教室(始)	水	
木	敬老の日	木	土曜学習	木		木	
金	⑦	金		金	移動教室(終)	金	②
土		土		土	運動音楽会(5)	土	どしどし集会
日		日		日	②	日	⑤
月		月		月		月	⑥
火	社会科見学(3)	火		火		火	
水		水	運動運動会	水		水	
木		木		木		木	
金		金	運動運動会	金		金	
土		土		土		土	
日		日		日		日	

(学級活動計画 一部例)

月日	曜	時	議題・活動内容	話し合い
10/21	金	4	思い出に残るための学芸会のめあてを考える	A
10/28	金	4	伊豆高原の班編成を決めよう	B
11/4	金	4	学芸会の取り組みをふりかえる	C

視点1の⑤ 役割を明確にする 6年 題材「手作り遊び集会を成功させよう」

<活動の概要>

児童にとって学校生活の中で最も楽しみにしているものに、手作り遊び集会がある。9月には手作り遊びコーナーとゲームコーナーの出し物が話し合われ決定された。話合い、準備と進む中で、ふりかえりカードを利用し、その時々自分をふりかえると共に今後の活動の見通しがもてるようにした。また、初めに全員が何らかの役割がもてるようコーナーごとに話し合い、前日準備の役割、当日の役割を決めた。この役割は、ふりかえりカードの中の下欄に書き加え、準備の日、当日の日の自分の役割が明確になるようにした。

<考察>

準備・実践での役割を分担する話合いの時間を確保したことで、児童は、自分の仕事が明確になると同時に、友達の仕事とのかかわりも意識するようになり、協力して活動した。また、ふりかえりカードに役割を書き込むことで、準備・実践での自分の具体的な動きを見通すことができ、積極的に活動した。

視点1の④

一連の活動のめあてをつくり、掲示する

5年 題材「難所めぐりを成功させよう」

<活動の概要>

全校集会の中に「難所めぐり」という遊びの集会がある。これは毎年、代表委員会が中心となり行うもので、各クラスの出し物を1～6年生で構成された、たてわり班でまわるものである。この出し物について、代表委員会の提案理由を基に、どんな出し物にすれば成功するだろうということクラス全員で考えた。そこで話し合ったことを基に、一連の活動を通しためあてをつくりあげ教室に掲示した。この話し合いをすることで提案理由をクラス全員が自分たちのものとしてとらえ、見通す力を育つようにしたいと考えた。

<考察>

初め、児童たちは今までにない試みにどうしてこんなに時間をかけて話し合うのか戸惑いを見せていたが、話し合いを進めていくうちに今までの体験を思い出し、それを基に活動全体を見通した意見なども出てくるようになってきた。また、活動のめあてが決まってからは「今度の話し合いや、準備の時にはこのめあてを頭の中に入れてやろうよ」などという声も聞こえた。この活動のめあてをつくることで、児童が、集会やクラスでの活動を今まで以上に自分たちのものとしてとらえ、意欲的に取り組もうとする姿勢が見られた。この掲示した活動のめあては、ふりかえりのときにも活用する予定である。

(2) 視点2「ふりかえる場の工夫」の実践事例

6年 10月の議題「連合運動会の取り組みをふりかえてみよう」

①学級活動ノートに自己評価・相互評価を記入する。

話し合いのめあてを基に学級活動ノート（項目別・記述式）に自己評価、相互評価をする。評価項目は、「自分は」「友達に対しては」「学級は」の三本柱にしてふりかえる観点を分かりやすくした。また、めあてをもてない児童のヒントカードにもなるように具体的な項目を考えた。記述には、自分や友達、学級全体の様子や次の活動への期待感などを書くようにした。

②ふりかえりカードを書く。

活動の一つ一つに自分がどのように取り組みどう思ったか、提案、話し合い、準備（練習）、実践をその都度ふりかえて自分の気持ちを心情曲線で表したり、吹き出しにして記述することで満足度を確認し、次の活動を意識するようにした。

③全員で一連の活動をふりかえる。

個々のふりかえりを基にして、小集団（班）で意見を出し合いよかったことと直したいことにまとめたものを全体の場で発表し、一連の活動を学級全体でふりかえた。このことによって学級の満足度を確認し、どうすればさらにより学級活動になるのかに気づき、具体的な手立てを考えるようにした。より学級全体のふりかえりとして考えられるようによかったことと直したいことは色分けしたカードに書き、一連の活動ごとにまとめて黒板に掲示する工夫をした。

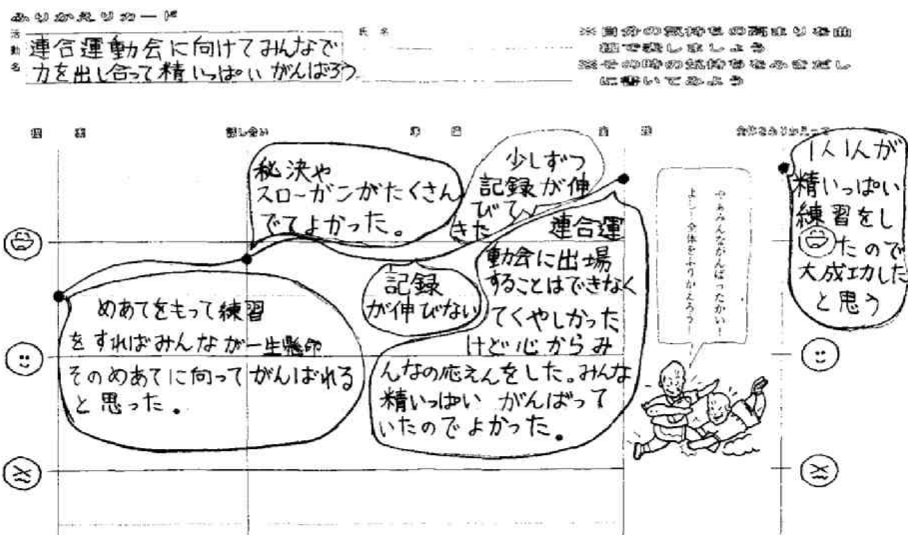
【本時にいたるまでの一連の活動】

議題の提案 全員で承認
学級活動ノートをつくる	全員で提案理由を基に話合いのめあてをたてた。 話合いのめあてを基に自分のめあてを考えた。 ◆ふりかえりカードに記入 話し合う内容について考えを書いておくことを確認した。
学級活動 学級活動ノート、◆ふりかえりカードによりふりかえりをした。
練習 話し合ったことが生かされているか意識するようにした。 ◆ふりかえりカード記入
校内記録会 全員が自分の記録を伸ばそうと頑張った。
連合運動会当日 選手は競技で力一杯頑張り、選手以外の児童は選手を励ましたり応援した。◆ふりかえりカード記入
個人でのふりかえり ◆一連の活動をふりかえり自分がどう思ったか記入した。
議題の提案 全員で承認（先生から提案し計画委員会が承認をとった）
学級活動ノートをつくる	話合いのめあてについては今回は計画委員会で考えて承認された。
学級活動（本時） 「連合運動会に向けての取り組みをふりかえろう」

【考 察】

話合いのめあてや自分のめあてをもつことで、学級活動ノートによる自己評価、相互評価ではめあてに沿ったふりかえりができ、実践に向けての意欲も記述に表れていた。一連の活動を学級全員でふりかえる場では、まず小集団で話し合うことで、一人一人のふりかえりを生かすことができた。また、よかったこと、直したいことをカードに書き黒板全体を提案、話合い準備（練習）、実践の活動ごとに区切って掲示したことは学級全体の様子を一人一人がつかむのに効果的であった。

そして何よりも「話合いで決めたことが役に立ちよかった。」「活動のめあてがあったのでがんばれた。」という児童の発表を聞いたり、どうして成功したのかどうすればよくなるのかを全員で考えることにより、提案から実践に至る活動の連続性を意識し、次回の活動への意欲を生むことができることと確認できた。



4 まとめと今後の課題

「見通しをもつ場の工夫」「ふりかえる場の工夫」を通して、研究テーマに迫ってきた。本研究から、主に以下の点が明らかになった。

(1) 研究の成果

視点1 見通しをもつ場の工夫

- 学級活動計画を立て、掲示したことにより、児童が見通しをもち自分から予定を立て、積極的に取り組む場面が多く見られるようになってきた。
- 提案理由を全員で確認しながらそれを基に話合いのめあてを作ったことで、学級全体としてめあてに向かってがんばろうとする話合いへの意欲が高まってきた。
- 話合いのめあてを基に自分のめあてを書くようにしたことで、一人一人が全体的な立場に立った考えをもてるようになり、実践を見通した発言内容が見られるようになった。
- 題材により、一連の活動のめあてをみんなで作り掲示したことで、活動に対する意識が高まり、実践に向けて意欲的に準備や練習をする姿が見られるようになった。
- 準備・実践での役割を話合いにより全員で分担し、ふりかえりカードに役割を書き込むことで、自分の役割を意識し、意欲的に活動するようになった。

視点2 ふりかえる場の工夫

- 学級活動ノートの評価項目を「自分は」「友達に対しては」「学級は」の三本柱にしてふりかえる視点を分かりやすくしたことで、自分だけではなく友達や学級全体を見つめることができるようになった。また記述には次の活動への期待感などを書くようにしたことで、実践に向けての意欲が表れるようになってきた。
- 提案、話合い、準備、実践という一連の活動をその都度ふりかえりカードでふりかえたことで、次の活動を意識し、がんばろうとする気持ちをもつことができた。
- 個々のふりかえりを基に学級全員でふりかえる場をもったことで、一連の活動のつながり（連続性）を意識しながら、学級としての満足度を確認することができた。さらに次の活動へ向けての具体的な改善策などが意欲的に出されるようになった。

(2) 今後の課題

- 話合いのめあてや自分のめあてを考える際に、議題に即しためあて、実践を見通しためあてなど、更に質の高いめあてをもてるように継続的な助言が必要である。
- ふりかえりカードを使っての個々のふりかえりや、それを基にした全員でのふりかえりは、時間の確保が難しいので、題材を選定することが必要である。また、朝の会や帰りの会を利用する事も考えていきたい。
- 全員でのふりかえりの場を学級会として行う場合、児童の主体的な運営（司会）を支えるために、話合いの柱立ての工夫などにさらに検討していく必要がある。

IV 互いに支え合い、学び合いながら、 意欲的に活動する代表委員会の指導の工夫

(児童会活動分科会)

1 主題設定の理由

代表委員会活動は、児童会活動の目標にある活動内容のうち、『学校生活に関する諸問題を解決する活動』の中核をなす活動である。主として高学年の代表者が、全校児童の意向を反映し、学校生活をより向上発展させるために、自発的、自治的に行われる活動であり、最も全校的視野が必要とされる。したがって、代表委員会の活動が活発に行われれば、児童会活動も活性化され学校生活も向上していくことが期待できよう。

しかし、本分科会での協議では、現状の代表委員会は必ずしも活発ではないとの共通認識に至った。代表委員会は、学級・委員会・クラブなどの代表者によって構成され、出席する児童は『それぞれの集団の代表である』という責任感をもって集まってきている。そこで、児童も指導者も、所属する集団と児童会とのパイプ役（連絡係）としての役割に重きを置き過ぎてしまい、委員は代表である以前に、児童会を構成する一個人であるという視点が欠けやすい。また、おおむね月1回の活動だけでは、年間活動計画を消化するのが精一杯となり、自発的、自治的な活動を行う時間的余地が少ない。その結果、代表委員会に所属する児童が、それぞれ目的意識をもって意欲的に活動できる状態には必ずしもなり得ず、現状の代表委員会は、自主性や社会性を養い、個性の伸長を図るという児童会活動の目標を達成する場として、不十分であると言えよう。

代表委員会を単なる『それぞれの集団の代表』の集まりに終わらせるのではなく、代表委員一人一人が『自分たちの学校をよくしていくために集まった仲間（集団）』であるという意識をもって活動していく場にする必要がある。同じ目的をもつ者として、互いに支え合ったり、学び合ったりしながら、一人一人のもてる力を十分に発揮できる意欲的な代表委員会にしていきたい。そして、代表委員にとって、代表委員会が、立場も年齢も違う仲間のよさに気付き、認め合い、高め合える心の通う場であって欲しい。このように考え、本主題を設定し研究を進めることにした。

2 研究仮説について

(1) 代表委員一人一人の持ち味が生きる活動の工夫

代表委員会は、時間的制約から計画委員会などから出された原案を、承認するだけになりやすい。代表委員は、代表という立場から各集団の意見を伝達するだけになりがちである。つまり、そこに集う児童一人一人の『持ち味』が生きる場になり得ていない。児童は「代表なら誰でもいい」と感じ、自分自身の力を十分に発揮できた、という満足感をもちにくい。そこで、一人一人の『持ち味』が生きるように工夫すれば、より意欲的に活動できると考えた。なお、本分科会では、『持ち味』を一人一人がもつ資質や能力の傾向性と考え、潜在的なものや、可能性のすべてを含むありのままの姿とした。

(2) 委員相互のつながりが強まるような支援

代表委員会は、異年齢集団による活動を特質としている。学年が違くと日常のかかわりが薄く、互いのことをよく知っているとはいえない。集まってくる児童には、緊張感や対抗意識などがあり、その特質が十分に生かされていない。さらに、同じ目的をもって集まった仲間としての連帯感も生まれにくいことになる。そこで、委員相互のつながりが強まるような支援をすれば、学年や発達段階に応じて児童が自分たちで活動できるようになり、より意欲的な集団活動が展開されると考えた。なお、本分科会では、『つながり』を連帯感を伴った精神的な結びつきとした。

私たちは以上のように考え、次の仮説を設定し研究を進めることにした。

研究仮説

代表委員一人一人の持ち味が生きる活動を工夫し、委員相互のつながりが強まるように支援すれば、意欲的に活動する代表委員会になる。

3 仮説検証の具体的な手だて

本分科会では、「代表委員一人一人の持ち味が生きる」を『個』に対する視点、「代表委員相互のつながりが強まる」を『集団』に対する視点ととらえた。望ましい集団の中でこそ個が高まり、個が高まることによって望ましい集団に育つ、という相互作用があると考え。代表委員会活動では、『個』と『集団』の両方をどれだけ高めることができるかを常に念頭におき、以下のような具体的な手だてを考えた。

(ア) 雰囲気づくりの手だて

限られた時間の中で、一人一人が持ち味を発揮したり、お互いを知り合って協力して活動したりするためには、教師の意図的な場づくり、雰囲気づくりが必要である。

- ・自己PRカードの工夫
- ・委員紹介（作文やビデオなど）
- ・小グループでの活動
- ・座席の工夫
- ・名札の工夫
- ・掲示の工夫

(イ) 多様な活動を引き出す手だて

一人一人の児童が自分の持ち味を発揮しながら、他の児童とかかわる場や機会を増やすには、話し合い活動を中心に多様な活動を引き出していくことが必要である。

- ・活動内容の見直し
- ・年間計画の作成
- ・活動内容の明確化
- ・役割の細分化
- ・実践活動の重視
- ・活動の継続化
- ・活動時間の確保
- ・代表委員会カードの活用
- ・資料の活用

(ウ) 認め合いの手だて

持ち味やつながりを児童自身が認識することによって、その質は高まっていく。したがって、活動の様々な場面で持ち味やつながりを児童が実感できるような認め合いの工夫が必要である。

- ・自己評価
- ・相互評価
- ・全校からの評価

4 研究内容

実践事例1 議題「代表委員会をPRする方法を考えよう」

委員相互のつながりが強まるような支援

- (ア)・小グループの活用 (イ)・実践活動の重視 (ウ)・児童による相互評価
・座席配置の工夫

「代表委員になりたくない」と考えている児童の多くは、その活動内容を知らないということが、アンケート調査の結果明らかになった。そこで、後期の代表委員選びをする前に全校児童に向けて積極的に代表委員会のPR活動をしようという結論に達した。クラスや委員会の連絡役として単に話合いを重ねるだけではなく、実践活動を重視することによって、委員相互のつながりが生まれると考えた。本校は大規模校であり、代表委員会も3年生から6年生までの48名という多人数で構成されている。お互いが学年を越えて話しやすい雰囲気をつくるため、10人前後の異年齢グループを活用することにした。座席の配置も、グループ内全員の顔を見やすくするため、正方形の机を囲んで座るように工夫した。児童による相互評価の手だてとしては、代表委員会カードに「今日のMVP」欄をもうけ、活動中でお互いの発言はもちろん、行動も含めた持ち味を認め合うことによって、より児童相互のつながりが強まるようにした。

活動の概要 4つの縦割りグループに分かれてPR活動を進めることになった。まず、「PRする方法」としては、4グループともビデオを使ったテレビ放送による発表に集中した。つぎに「PRの内容」を話し合った結果、1組グループは「代表委員になって自分自身が積極的になれたことを劇にする」、2組グループは「児童会行事の舞台裏を劇にする」、3組グループは「明るく楽しい代表委員会をオペラ調の歌にする」、4組グループは「どの学年とも気さくに話せる雰囲気を劇にする」と内容に違いが生まれた。6年生が積極的にリードし、どの学年の児童も活発に意見を出し合うことができた。最後に「今日のMVP」は、どの学年からも選ばれ、中には全員がMVPだというグループもあった。その理由も、司会が上手だったというものから、みんなの雰囲気を明るくしてくれたというものまで、多様であった。

考察 今までとは座席配置を変えたこともあり、最初はとまどいも見られたが、最後まで笑顔の絶えない活発な話合いであった。後日、各グループに分かれて自主的に劇や歌の練習をした。そのころには、お互いをニックネームで呼び合えるくらいにつながりができてきた。普段の代表委員会では、発言をしたことがない中学年のある児童も、リラックスして高学年に話しかけていた。多くの児童が、それぞれ自分のクラスで活躍していても、その持ち味を代表委員会で発揮できずにいたということを、改めて知ることができた。PR活動のビデオを、児童集会時に放映したところ、大反響があった。後期代表委員選びは、例年になく立候補者が多かったという報告が、各担任や児童から多数寄せられ、前期の代表委員は大喜びであった。

実践活動を中心においた今回の手だては、委員相互のつながりが強まるような支援として有効であった。

実践事例2 議題「お互いによく知り合って、楽しい代表委員会にしよう」

代表委員一人一人の持ち味が生きる活動の工夫

(ア)・自己PRカードの工夫 (イ)・活動計画表の掲示

委員相互のつながりが強まるような支援

(ア)・自己PRカードの工夫 (ウ)・委員紹介の工夫

年度当初に行った代表委員会に対する児童の実態調査から、「他の代表委員にいやなことをされた」「係を勝手に決められた」などの時に「代表委員になっていやだった」と感じ、「友達がたくさんできた」「友達にほめられた」「いろいろな役をやれた」などの時に「代表委員をやってくれしかった」と感じていることがわかった。そこで、互いのことをもっと知り合うことができれば、委員相互のつながりが強まり、一人一人の持ち味が生きると考えた。そこで自己PRカードに写真を貼るとともに「ひとこと」の欄を作り、委員相互のつながりをもちやすくした。また「やってみたいこと」や「得意なこと」を書く欄も作り、持ち味が生きるように工夫した。委員紹介の工夫では後期第1回目なので、緊張から自己紹介もありきたりのものになってしまうと考え、学級での様子を含めた紹介を前期委員に依頼した。後期活動計画表を大きく掲示し、自分の持ち味が生かせるように、活動の見通しや期待感をもてるよう工夫した。

活動の概要 4～6年生の代表委員が混在する小グループを構成し、同じ学級の前後期委員が隣同士になるように着席した。まず、計画委員によるオリエンテーションの後、後期委員本人が名前だけの自己紹介をした。続いて前期委員が後期委員の紹介をし、グループの中で握手を交わして前期委員が退席した。その後、パネルに掲示してある後期の計画表を見ながら自己PRカードに「やってみたいこと」を記入し、何人かが発表した。「好きなことや得意なこと」「ひとこと」の欄は次回までに記入してくることにし、カードに貼る写真は後日撮影した。

考察 初対面同士の異年齢小グループとなる座席配置であったが、同じ学級の前期委員が同席したことで、緊張感も少なく和やかな雰囲気が始まることができた。また、前期委員からの紹介の内容は、学級会での活躍や休み時間の様子など幅広いものであったので、楽しい雰囲気で会が進行した。しかも、前期委員による紹介は引き継ぎにもなり、後期委員の意欲や責任感が増すことにもなった。しかし、後期委員が見通しや期待感をより具体的にもつためには、前期委員が紹介のみで退席せず最後まで同席し、行事での役割や仕事の内容などのアドバイスを後期委員にしてあげるとよかった。今後、自己PRカードを掲示するが、「やってみたいこと」「好きなことや得意なこと」の欄がお互いの理解のよりいっそうの手助けとなることを期待したい。



実践事例3 議題「全校種目とめあての係分担をしよう」

代表委員一人一人の持ち味が生きる活動の工夫

(イ)・実践活動の重視

今までは、決定したことを実行する段階では計画委員会を中心として代表委員数人で取り組んできたが、今回は代表委員全員で細部にわたって係分担をした。係を受けもつことにより、自分が参加したという実感をもつようにしたいと考えた。また、話合いの内容はより具体的な場面に限定し、児童が工夫しやすく発想を生かせるようにした。

活動の概要 代表委員全員で係分担するという事は初めてだったのでとまどっていたが、各自が自分を生かせる係を希望していた。計画委員は連絡調整役で各係に入った。

考察 一つの行事に対して代表委員全員で係を分担し実行したことが、持ち味を生かし、つながりを生むきっかけとなった。その後の実際の活動では、かつてのように連絡がないと集合しなかったり、わかっているのに帰ってしまったりということがなくなり、自発的に集まって仕事を進めていた。5, 6年生は、学校全体の係の仕事があり、時間も確保されていない中での活動であったが、休み時間などを利用して進めていた。3, 4年生も「いつやるの?」と何度も顔をみせていた。放課後、3年生から6年生までが集まり「こうやっておしゃべりしながらやっている時が楽しいんだよな。」と言いながら、遅くまで残って係の仕事をしていた。そのような時は、代表委員だけでなく他の5, 6年生も集まってきて手伝っていた。仲間の輪が広がっていったことは、成果といえる。

5 まとめと今後の課題

(1) 研究の成果

- 小グループでの活動を増やすことによって一人一人の児童が発言しやすくなった。さらに、お互いの持ち味も認め合うことができ、高学年が中学年の意見を大切にするなど、異学年間のつながりが強まった。また、話合いの技術が少々未熟でも少人数のうちとけた関係の中で、内容が深められやすいという点も確かめられた。
- 実践活動の場を重視することにより、協力して作業を進めるなど委員相互のつながりが強まり、それぞれの持ち味も生かされることになった。
- PR活動に取り組むことにより、全校児童の代表委員会への関心も高められ、また委員の活動意欲もさらに高めることができた。
- 持ち味を発揮させるためには、児童による相互評価が有効であることがわかった。

(2) 今後の課題

個と集団を高めるには、年間の活動を見通し、段階をおって指導していかなければならない。また、限られた時間の中で代表委員会が児童主体の活動として展開されるには、内容を精選していくことが必要である。

V 児童一人一人が

積極的に参加できる学校行事の指導の工夫

(学校行事分科会)

1 主題設定の理由

学校行事の精選が叫ばれている今日、行事の価値を明確にするとともに、教師主導になりがちな学校行事の改善を図り、児童が主体となって積極的に参加できるようにすることが大切である。その中で、児童が自己を生かし、互いにかかわり合いながら意欲的に活動するようになることを考える。

学校行事分科会では、21世紀にはばたく児童の育成をめざし、児童一人一人が自ら進んで活動し、集団の中で成長していく主体的な活動に重点を置いて考えた。そこで、積極的に学校行事に参加する児童の姿・児童の活動をとらえ、各学校行事が共通にもつ指導過程を明らかにすることから、研究を進めることとした。そして、児童が主体的に活動するための指導の中心が支援であるととらえ、教師及び教師相互の協力による支援という構えで指導にあたりたいと考え、本研究主題を設定した。

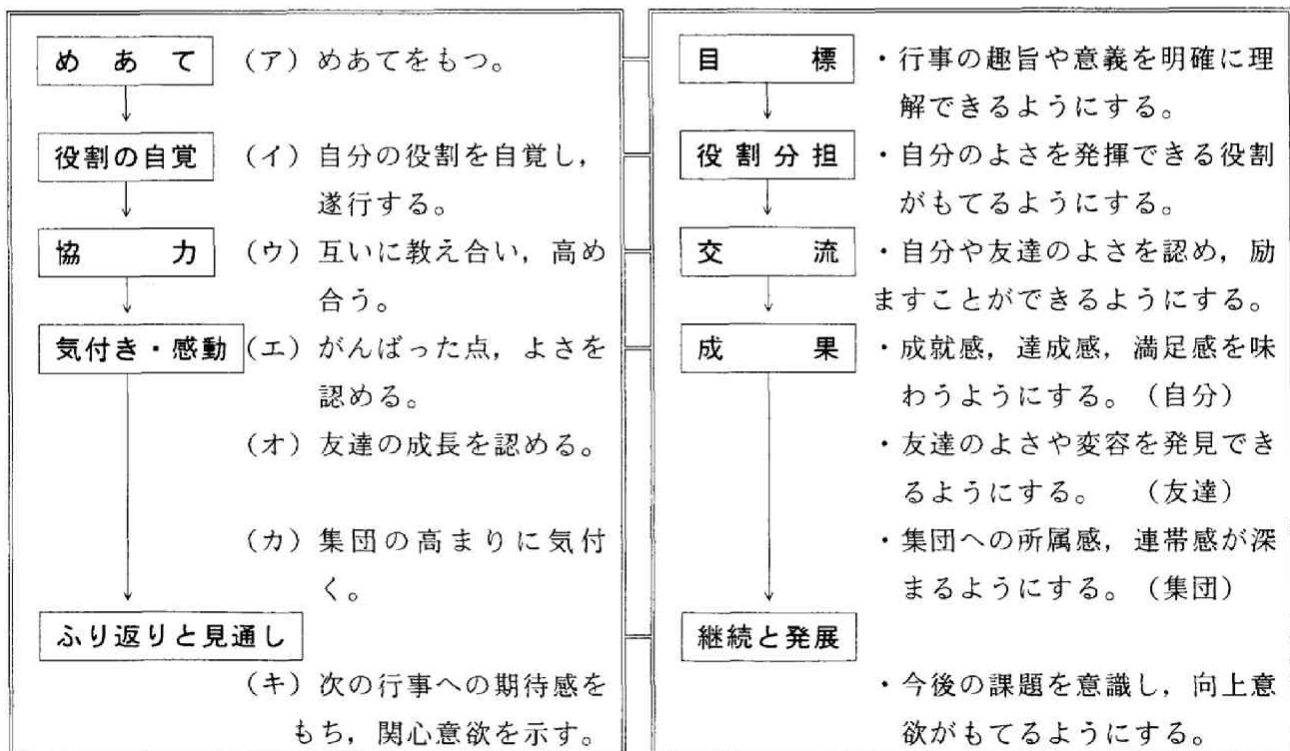
2 研究仮説

行事の指導過程を明らかにし、支援の仕方を工夫することによって、児童の一人一人が生き生きと取り組み、成就感や達成感、満足感を味わうとともに、次の行事により積極的に参加する意欲が高まるだろう。

3 研究内容

活動過程 積極的に参加する児童の活動

指導過程 教師及び教師相互の協力による支援



学校行事の特質として、指導過程が行事の種類と特質によって弾力的であること、児童の自主的な参加の態度が異なる場合があることを考慮する必要がある。

4 各行事における具体的支援の仕方（一例）

児童の姿	(ア) めあてをもつ	(イ) 自分の役割を 自覚し遂行する	(ウ) 互いに教え合 い、高め合う	(エ) がんばった点 よさを認める
支援の仕方	◎行事の趣旨・意義 を明確に理解できる ようにする。 イメージ化、意識化 する。	◎自分のよさを発揮 できる役割をもて るようにする。	◎自分のよさ、友達 のよさを認め、励ま すことができるよう にする。	◎成就感・達成感・ 満足感を味わえるよ うにする。（自分）
指導過程	目標	役割分担	交流	成果
(1) 儀式的行事 入学式、卒業式 始業式、終業式 修了式、朝会 開校記念に関する 儀式 新任式、離任式 など	低 趣旨・意義の説明 めあての発表 中 贈り物制作、感想発 表・手紙・作文 めあての発表 高 呼びかけの創意工夫 児童の決意表明・抱 負、ｶﾞﾝﾀﾞﾝｸﾞﾝｽﾀｰ	役割の明確化（掲示 ・学級通信） 役割カードの活用 役割の明確化（掲示 ・学級通信） 係活動の創意工夫 役割の明確化（掲示 ・学級通信）	自分のよさ・友達 のよさの発表 自分のよさ・友達 のよさの認め合い・励 まし合い 友達のよさを取り入 れ、自分に生かす 情報交換の活用	がんばったことの作 文・発表 個人への賞賛 がんばったことの作 文・発表 個人への賞賛 役割カードの成果記 入、新聞・通信等に よる感動のまとめ
(2) 学芸的行事 学芸会、学習発表会 作品展、音楽会 読書感想発表会 クラブ発表会 映画会、音楽鑑賞会 演劇鑑賞会 など	低 めあてカード 過去のビデオ視聴 中 めあてカード 過去のビデオ視聴 招待状の作成 高 過去のビデオ視聴 作文・作品紹介 ｽｰｶﾞﾝの設定・掲示 めあてカード	役割決め・係決め 励ましの言葉 公平かつ個性的な役 割分担 係活動の時間・場の 設定 係の仕事の創意工夫 進行状況の発表	友達のよいところの 発表会 教師の助言・賞賛 見せ合う・発表し合 う場の設定 よかったことの発表 見せ合う・発表し合 う・創意工夫する学 び合いの場の設定	がんばり賞、賞賛 がんばりカードの活 用 がんばったこと発表 会 賞賛 練習成果の発表会 賞賛 努力賞の授与
(3) 健康安全・ 体育的行事 健康診断のための行 事、大掃除、避難訓 練、交通安全指導 運動会、健康・安全 や給食に関する意義 を高める行事 競技大会、水泳大会 球技大会 など	低 めあてカード ビデオ視聴 中 趣旨・意義の説明 めあてカード・掲示 趣旨・意義の説明 ビデオ視聴、ｽｰｶﾞﾝ 高 めあてカード、趣旨 ・意義の説明、ｽｰ ｶﾞﾝ作り ビデオ視聴	個々の役割を決める 一人一人に励ましの 言葉 個々の役割を決める 一人一人に励ましの 言葉 係の仕事の創意工夫 進行状況の発表 資料・材料の提供	見せ合う・発表し合 う場の設定 活動への賞賛 見せ合う・発表し合 う・創意工夫する学 び合いの場の設定 合同練習 創意工夫する学び合 いの場の設定 よかったことの発表	がんばりカードの活 用、努力したことを 認める がんばりカードの活 用・発表会、努力し たことを認める がんばりカードの活用 練習成果の発表会 努力したこと・役割 遂行を認める
(4) 遠足・ 集団宿泊的行事 遠足、修学旅行 野外活動、集団宿泊 など	低 個人のめあてカード 予定・計画の説明 写真・地図の提示 中 個人・班のめあてカ ード 予定・計画の説明 写真・地図の提示 高 個人・班・係ごとの めあてカード、旗 合言葉、ｼﾝﾎﾞﾙﾏｰｸ ビデオ視聴と説明	個々の役割・係を決 める、一人一人に励 ましの言葉 個々・班毎・係毎の 役割の決定、公平か つ個性的な役割分担 係の仕事の創意工夫 進行状況の発表 児童のアイデアの活 用、資料の提供	励まし合い・努力・ 協力を見守り、促す グループによる励ま し合い・努力・協力 を見守り、促す 個人・集団（班・係 ・全体）の活動への 助言、円滑な活動の ための準備と工夫	楽しかったことの発 表 賞賛 楽しかったことの発 表、がんばった子へ の賞賛 がんばった子・係・ 役割・グループへの 賞賛 感想発表
(5) 勤労生産・ 奉仕的行事 飼育栽培活動 校内美化活動 学校園の手入れ 校庭の除草活動 学校周辺の公道の清 掃 公共施設の清掃	低 めあてカード ビデオ視聴 趣旨・意義の説明 中 趣旨・意義の説明 ビデオ視聴 高 趣旨・意義の説明 ビデオ視聴 先人の知恵を生かす	個々の役割・係を決 める、一人一人に励 ましの言葉 個々・班毎・係毎の 役割の決定、公平な 役割分担 係の仕事の創意工夫 児童のアイデアを生 かす 資料の提供	励まし合い・努力・ 協力を見守り、促す グループによる励ま し合い・努力・協力 を見守り、促す 学び合う場・リーダ ーシップ発揮の場の 設定、円滑な活動の ための準備と工夫	がんばり賞 賞賛 感謝の言葉・手紙 がんばったこと発表 会、賞賛、地域の人 からの感謝の言葉 役割遂行、成果の発 表、地域への寄与 賞賛

(オ) 友達の成長を認める	(カ) 集団の高まりに気づく	(キ) 次の行事への期待感を持ち、関心意欲を示す	各行事の特質・特性
◎友達のよさや姿容を発見できるようにする(友達)	集団への所属感・連帯感が深まるようにする。(集団)	今後の課題を意識し、向上意欲がもてるようにする。	◎この行事で期待できるもの こんな力が身につく
成果		継続と発展	
がんばったことの作文・発表→賞賛	クラスでがんばったことの話し合い	行事のまとめ 次の行事を簡単に予告	学校生活に折り目をつける。
努力の認め合い・たたえ合い→賞賛	クラスや学年でがんばったことの発表会賞賛	行事のまとめ 期待感の継続	学年・学校などへの所属感をもつ。 礼儀・規律ある態度を身につける。
努力・姿容の認め合い・たたえ合い→賞賛	高学年としての仕事の成果(下級生・地域への寄与)	親・教師・地域の人々への感謝 将来への希望	学校・社会・国家など、集団への所属感を深める。 集団の場における規律・気品のある態度を身につける。
がんばったこと発表会賞賛	クラスでがんばったことの話し合い賞賛	次の行事の楽しさの予告 ビデオでのふり返し 予定表の掲示 ビデオでのふり返し	豊かな情操を育む。 意欲を育てる。 人間関係をつくる。 個性・意欲を育てる。 豊かな人間関係を育てる。
がんばったこと発表会での認め合い賞賛 相互評価する時間・場の設定 教師、保護者、地域の方の感想紹介	クラスや学年でがんばったことの発表会感想紹介 高学年としての仕事の成果とめあて達成の確認 感想紹介	反省する時間・場の設定 予定表の掲示 ビデオでのふり返し	個性・意欲を伸ばす。 学校への所属感・連帯感を高める。
がんばったこと発表会→賞賛 友達への応援 がんばったこと発表会での認め合い→賞賛 友達への応援 相互評価する場や時間の設定 保護者の感想紹介 友達への応援	クラスでがんばったことの話し合い クラスや学年でがんばったことの発表会感想紹介 高学年として仕事の成果とめあて達成の確認	(学級の宝物)ががんばったこと発表会 ビデオでのふり返し (学級の財産)ががんばったこと発表会 ビデオでのふり返し (学級の歴史年表)係ごとの報告会 ビデオでのふり返し	自分の体について関心をもつ。 意欲を育てる。 運動の楽しさを知る。 学級・学年・学校への所属感を高める。 運動の楽しさを高める。 児童会活動の活性化により、人間関係を育てる。 学校・地域への所属感を高める。 生涯スポーツの基礎を培う。
友達のよいところさがし→賞賛	一人一人のめあて達成の確認	(楽しさの共有化) 作文・発表、ビデオ・写真でのふり返し	体験の喜びを味わう。 公衆道徳を学ぶ。
友達のよいところさがし(自分との比較)→発表・掲示	一人一人・班ごとのめあて達成の確認	(感動の共有化) 作文発表会、ビデオ・写真でのふり返し	人間関係を深める。 自然・教師・児童相互のふれ合いをもつ。
友達のよいところさがし(係活動・役割を通して)→作文・発表・掲示	一人一人・班・係ごとのめあて達成の確認	(感動・責任感の共有化)作文発表会 ビデオ・写真でのふり返し	人間関係を深め合う。 自分たちの計画にしたがって、活動を創意・工夫する。 自然・教師・児童相互のふれ合いをもつ。
友達のよいところさがし→賞賛	めあて達成の確認 成果の発表	(奉仕活動の大切さ) 説話 ビデオでのふり返し	自然を愛する心 感謝の心をもつ。 異年齢交流
友達のよいところさがし(自分との比較)→発表・掲示	めあて達成の確認 収穫や成果の報告・掲示	(地域とのつながり) 説話 ビデオでのふり返し	勤勉・協力の心 感謝の心をもつ。 異年齢交流
友達のよいところさがし(係活動・役割を通して)→作文・発表・掲示	めあて達成の確認 収穫や成果の報告・掲示	(社会貢献の必要性) 説話 ビデオでのふり返し	公共のために尽くす心 責任感をもつ。 異年齢交流を通して、リーダーシップを育成する。

5 実践事例（学芸的行事）

《音楽会についての取り組み》

(1) 事例の概要

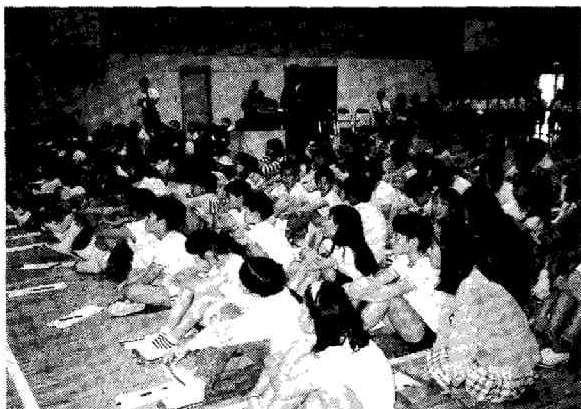
目標 → 役割分担 → 交流 → 成果 → 継続と発展 という指導過程ののって活動を行った。以下は、各指導過程における教師及び教師相互の協力による支援の具体例である。これらの活動を通して、自分たちの合唱・合奏の練習をはじめ、係活動等に積極的に取り組み、当日も生き生きとした活動がみられた。

指導過程	教師及び教師相互の協力による支援
目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 行事の趣旨や意義を考えるようにする。教師の願いを知る。 ・ めあてをもつ。…自己の参加目標、努力目標、心がけること等、具体的なめあてをもつ。（音楽会実践カードの利用） ・ 過去のビデオの視聴、作文紹介（イメージ化）・スローガンの設定・掲示
役割分担	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分のめあてから…自分のパート・係が実行することを自覚し、自分の課題として取り組む。 ・ 係ごとの打ち合わせ日を設け、係活動の時間を確保する。 ・ 各パート・係の仕事の進行状況の発表（朝の会・帰りの会を利用）
交流	<ul style="list-style-type: none"> ・ 練習の場を利用して教え合い、高め合い、認め合う。（パート別、クラス、学年合同練習、朝・帰りの会を利用した練習）
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 練習の成果の発表（朝の会や帰りの会を利用、相互評価の場） ・ 音楽会実践カードの利用（自己評価、がんばった点の記入） ・ 教師、保護者、地域の声・感想の紹介（学年、学級通信等を利用） ・ 最高学年としての仕事の成果とめあて達成の確認
継続と発展	<ul style="list-style-type: none"> ・ ビデオでのふり返し ・ パート、係ごとの報告（反省する時間、場の設定） ・ 次の行事までの予定表の掲示

(2) 活動の実際

音楽会の取り組みに関する第1時間目の活動として、学級ではなく、学年集会として行った。学年合同で行ったことにより、音楽会の意義について共通理解を図ることができ、また、学年で取り組むんだという意識を高めることができた。

まず、過去の音楽会のビデオの視聴や卒業生の音楽会の感想の紹介を通して音楽会を想起し、関心や意欲・期待感が高まるようにした。次に、音楽会の意義について話し合った。



意義を理解することにより、最高学年としての音楽会に対する取り組み方が、より真剣なものになると考えた。そして、音楽会を成功させるために、どんなことをしたいか短冊に記入し、個人・学年・学級・係で取り組めることの観点別4グループに別れ、話し合っ、まとめた。この話し合いをもとにして、より具体的な学年・学級・個人のめあてを立てることができ、次の活動で、より意欲的に取り組むことができた。

(3) 指導の工夫

①学年を単位とする指導を3時間設けた。

ア 音楽会の趣旨や意義を理解する活動（1時間、実践事例）～ **目標**

イ 係分担をする活動（1時間）～ **役割分担**

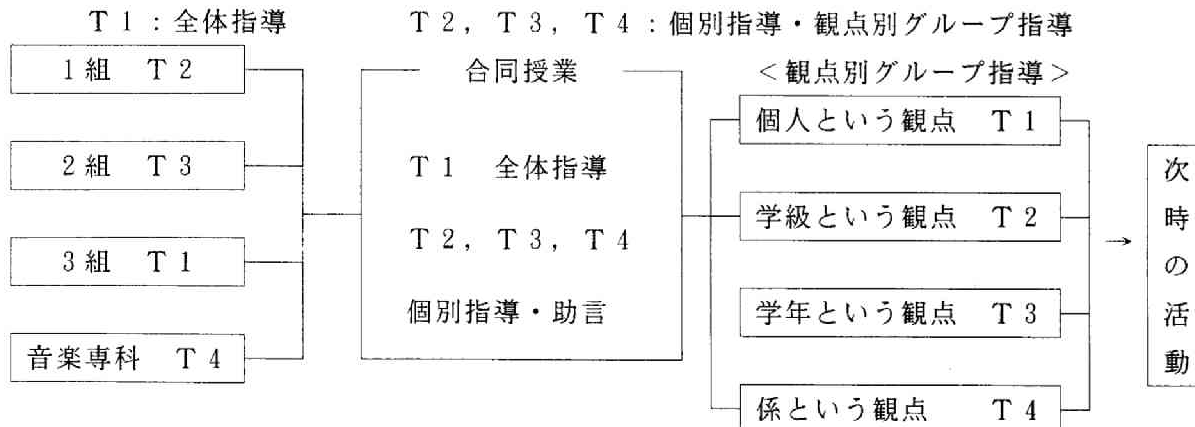
音楽会の係決めを学年合同で行い、各係ごとに仕事の内容を確認し目標を立てた。係打ち合わせ日の活動では、スムーズに仕事を進めることができた。

ウ 音楽会を振り返る活動（1時間）～ **継続と発展**

成果と反省・これからがんばりたいことを学年全体で確認した。係・各パート等、学級を越えた集団で成果を確認することを通して、お互いに認め合い、高め合うことができ、次の活動への意欲を高めることができた。

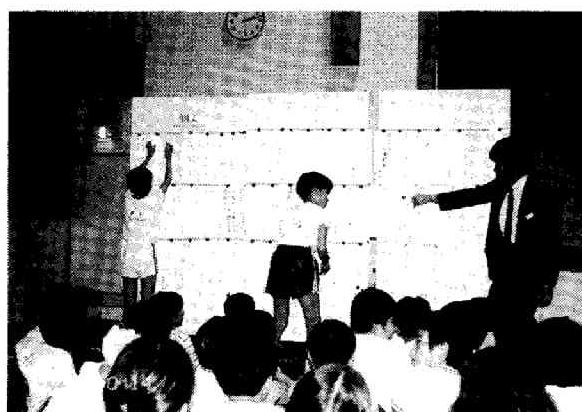
②複数学級合同で授業を行うので、TT方式を活用し指導にあたった。

以下は、実証授業でのTTの役割分担である。



(4) 考察

学年・学級・個人のめあてを具体的に音楽会実践カードに記入したことにより、参加意欲が高まり、クラスを越えて自主的に音楽室に集合し、合奏の練習をする姿が見られた。期待感を高め、各自が見通しをもって活動に取り組むことにより、練習はもとより、音楽会当日も意欲的に参加するようになるということが、今回の指導を通して確かめられた。



また、指導過程を明らかにし、その各段階で、学年を単位とする指導を取り入れたことにより、学級という枠がなくなり、学年として認め合い、高め合い、協力することの大切さを実感し、今後の学校生活や行事への意欲が高まったことが確かめられた。指導過程及び支援の具体例を意識して指導にあたったことにより、教師間の共通理解も図ることができた。

6 まとめと今後の課題

(1) 研究の成果

児童一人一人が生き生きと取り組み、次の行事により積極的に参加する意欲を高めるためには、行事の指導過程を明らかにし、支援の仕方を工夫することが必要である。そこで、学年段階による具体的支援の仕方を考え、各行事で検証してみたが、行事によって、めあてや役割分担、交流等の重点の置き方に違いがあることが明らかになった。例えば、儀式的行事の始業式や終業式では、児童がめあてや目標をしっかりとめるようにすることが意欲につながるため、その行事のもつ特質・特性に結び付けた支援が必要であることが分かった。

検証の過程で、具体的に明らかになったことは、以下の通りである。

- ・めあてカードやがんばりカード等に個人や学級・学年のめあてを記入することにより、趣旨や意義が理解でき、参加意欲が高まった。また、成果達成の確認では、児童がカードに記入することによって、成就感・達成感・満足感を味わうことができ、より効果的なカードの活用ができた。
- ・カードを学級内や廊下に掲示することにより、友達のめあてを知ることができ、だれもが自分なりに、めあてをもてた。
- ・児童の希望を尊重し、役割分担の中で、公平に、かつその子のよさが発揮できるような役割をもてるよう、支援の工夫をした。それによって、一人一人の児童が意欲的に参加できた。
- ・役割分担を学級・学年通信に載せ、各家庭に配布することによって、教師だけでなく、保護者からの励ましの言葉をもらうことができ、児童は責任をもって行動するようになった。
- ・個人だけでなく、合同練習やグループ別の活動の場を設定することにより、児童が互いに励まし合い、教え合い、高め合うことができた。

(2) 今後の課題

各行事における具体的な支援の仕方について、重点化や、行事と行事のつながり、指導過程の系統性をさらに考えていかなければならない。そこで、児童会等の集会や、各学校で行われている行事も、地域や学校の実態によって多種多様であるので、各学校の特徴を生かした教育計画、教師及び教師相互の協力が必要であり、支援の仕方も絶えず工夫していく必要がある。

- ・行事における具体的支援として、ビデオや写真で記録を残すこと、視聴覚機器、パソコンの活用、児童が興味を引くようながんばりカードの工夫がよりいっそう必要であると考えた。
- ・役割分担で、不本意な役についた児童に、意欲をもたせるための支援等、一人一人の児童によりきめ細かな支援の工夫が必要である。
- ・学校週5日制に伴う学校行事の精選において、行事のもっている教育的価値をさらに見直す必要性が出てきている。また、指導の時間と場の確保が必要であり、日常活動、各教科、道徳との関連を十分に図らねばならない。